後藤静香選集　第四巻

後藤静香選集

第四巻

善本社

刊行のことば

一八八四年大分県に生れた著者は、東京高等師範で数学を学び、女子教育に従事すること十三年、使命を感じて退職上京、全国を対象とする社会教育に身を投じ、これに挺身すること五十年、一九六九年八十五歳で東京に没した。

生涯に創刊した月刊誌二一種、その多くは一人で執筆し、その最盛期には購読者百万人をこえ、輪転機で印刷した。著書七〇余冊。

彼は単なる講演者著述家ではなく、常に大衆教育家、文化運動の指導者であった。勤労教育の主張と実践をはじめとし、救ライ、愛盲、老人福祉の先駆者、ローマ字、エスペラント、現代かなづかい等のすぐれた宣伝普及家でもあった。

今その生涯の全著作から、代表的なものをえらび、ここに「後藤静香選集」全十巻を刊行、後世への文化遺産とする。

後藤静香選集　第四巻
講話・処世の信条・自著批判

一九七八年四月十日　初版

著者　後藤静香
発行者　山本三四男

企画編集　後藤静香選集刊行会
代表　中山隆祐
〒160 東京都新宿区高田馬場一―二三―一二
振替　東京0―一一二九〇

発行所　株式会社　善本社
〒101 東京都千代田区神田神保町一―六〇
電話　東京　二九四―五三一七
振替　東京　九―一一九五五七

印刷　花山印刷

落丁、乱丁はおとりかえいたします

0312―005301―3993

《目次》

講話

第一回　悶えから覚めて……三
第二回　のびんとする力……二〇
第三回　境遇と人物……二四
第四回　願いはかなう……四七
第五回　働きに活きよ……六六
第六回　光はただよう……七七
第七回　愛の瞳……九五
第八回　共存共栄……一二二

第九回　六つの自由……一三八
第十回　望みに輝く心……一五六

処世の信条

第一編　根本的信条……一八一
根本原則……一八二
生きる様式……二〇五
彼は立つ……二三〇
彼は歩む……二三八
彼は登る……二四九
彼は飛ぶ……二五七
第二編　原則の活用……二六三
七つの灯火――ジョン・ワナメーカーを憶う――……二六四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

機　敏……二七四
疾風の如く……二八一
集　中……二八七
第三編　世界の家庭化……三〇三
現代救済の基調……三〇四
家庭意識の拡張……三一三
ロンドンなる未知の友へ……三二六
人類愛の発現——ドイツ児童救済の跡——……三四〇
▒自著批判
見直した「講話」……三五〇
「後藤静香選集」第四巻の解説（加藤善徳）……三五四

講話

序

若い人たちへ、心をこめて話したい。自分が迷ったこと、あやまったこと、そんなことを反省しながら、ただ親心で、誰にもわかるように話したい。――こうした願いがペンをとおして現われたもの、それがこの講話である。世のいわゆる名演説集といったようなもの、また何々氏の壇上獅子吼といったようなものではない。

読む人たちの心をなぐさめたり、はげましたりして、この人生に対し、社会に対し、明るい見方、考え方に導こうとつとめている。平易な言葉に、深い意味をふくめたところも少なくない。

若いときに書いたものだけに、幼稚なこともあるが、純真さもある。今の自分が読んでも、これだけは世に遺して、いくらか役に立つと思い、この叢書に入れた次第である。誰にでもわかる、一人が読んで多数で聞くにも適する話として、若い人々へおくる。

昭和六年五月晩春　　後藤静香

第一回　悶えから覚めて

新生の子

倒れたならばたて！
昨年失敗したならば今年成功せよ
失望は勇気の自殺である
出ずる月を待て
散る花を追うなかれ
後にあるものを忘れて前にあるものを望め！
太陽は暁の雲を破って昇る
新生の子よ
新しい大地の上に、新しい第一歩をふめ

覚めゆく悶え

「悶えから覚めて」という演題をかかげましたが、便宜上、二段に分けてお話し申します。まず「覚め

ゆく悶え」について、考えてみましょう。新聞雑誌や幾多の新刊書を通して運びこまれる新しい思想の流れは、遠慮もなく、寒村の隅々にまでおよんでまいりました。覚めよさめよと乱打する怪しい警鐘のひびきが、平和なる、静寂なる、美しい空気をかきみだしております。若い幾多のたましいは、静かな眠りからよびさまされました。眼をみひらいて、周囲を見まわしましたとき、恐ろしい不安にとらわれました。そうしてみぶるいしながら申しました。

『ああ何というおくれかたであろう。私たちは、どうしたらいいのだろう？　こうしてその日その日を送る。意味もない月日が過ぎて行く。田舎に生れ、田舎に育ち、田舎で死んでゆく。それでいいのであろうか？　また、なぜそうして終らねばならないのだろうか？』

私どもは、このような真面目な悶えを、ただ黙って眺めてはいられないのでございます。

○

ある婦人の方にたずねました。

『あなたは、いつもタビをおはきになるとき、どちらから先になさいますか？』

婦人は、あまりに意外の質問であったため、ちょっとまごついて

『どちらを先？……いつも左を先にいたします。』

『なぜでしょう？』

『さあ、なぜでしょう？』

同じ言葉をくり返して考えこむのでした。

これまでタビをはいたことは幾度あったか分からない。しかもただ一回でも、いずれを先にはくかというような問題にふれたことはなかったのです。毎日くり返していたあたり前の事柄が、今、げんぜんたる一個の問題として、提供せられたのでございます。

○

『百姓の子は百姓、商人の子は商人、小作人の子は生涯小作人で、一生借金に追われる。』長い間、これはあたり前のこととして、別に、考えの上にのぼらなかったのでございます。そんなことに対して、真面目に疑いを持つものでもあれば、それがかえって気狂いか、いわゆる危険思想の人間と認められていたのでした。しかるに、今はこのような事実に対し、誰でも真剣に考えてみねば、習慣のままでは承知ができなくなったのでございます。

書物を読んで見ます。名士の講演もきいて見ます。何だか分かったようであるが、さて、実際問題として考えて見ますと、ちっとも分からない、何らの解決もつきません。彼らは、親の命令どおりに働きます。貧乏人の子だから小学校を卒えたままで百姓するのだとあきらめて、鍬をふるってはみます。しかし、どうしてもあざむくことのできないのは、われ自らの心のうちに、深くきざしている一種の不安でございます。

『自分は、これでいいのであろうか？　こうして暮らしておればいいのであろうか？』

とうとうたまりかねて、父親に、おそるおそるたずねてみます。初め半分ほど聞いた父は言葉をあらげて、一言のもとにはねつけます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『百姓の子が学問をして何になるか！　貧乏人の子に学問ができると思うか！』

この頃、ちょっとの暇をぬすんでは、書物をみたり、演説をききに行ったり、時としては、畑のあぜに腰かけてぼんやり考えこんだりしているので、父親のごきげんがかくべつ悪い。彼はなるべくすなおに父の言葉を受入れようとつとめる。

本当に、親父の言う通りだと、しいてわが心を満足させようとおさえつけてはみるものの、なお胸の奥には、根本的なる疑問が横たわっているのでございます。

『学問をして、何になるのか知らぬ。何にもならぬのかも知れない。しかし、何になってもならなくても、今のような物知らずのバカで死にたくないではないか。貧乏人の子は学問をされぬというが、苦学した話もあれば、それで成功した事実もある。何の因果でこのままに朽ちはてねばならないのであろうか？』

若い婦人にも、また同様の悶えがあります。

『女は、なぜ結婚せねばならないのだろう？　なんにも知らないで人の妻となり、母となる、それがかえって罪悪ではあるまいか？　独立したい。なにか職業をもちたい。田舎では何とも仕方がない。東京に出かけよう。食べさせてもらいさえすればよい。どんな苦労もする。小間使、行儀見習、そうして修養……』

思いつづけていると、もう一刻もがまんができぬ。時代おくれの父や母に何がわかるものか。高等女学校にさえ出してもらえず。嫁入り仕度――ああそんなものが何になる。着物などほしくもなんともな

い。都会にあこがれるといえば、人は虚栄心のためと思うであろう。しかし、自分の心は決してそんな浮いた気持から動いているのではない。これは誰よりも自分が一番よく知っている。ああ、そうじゃ！誰が何と言ってもかまうもんか。旅費だけためてとび出そうか。しかし、誰を目あてにどこに行く？自分の行ったあとで、年寄った父上がどんなにか、なげかれることであろう。弱い母上は心配のあまりきっと病気になるに相違ない。……ああやっぱり、このままに、その日ぐらしをせねばならないか？』

○

大手術をした病人が、マスイ剤からさめるとき、だんだんとはげしい痛みを感ずる。

覚めゆく悶え！
滔々二千歳を貫く伝統の流れより
覚めゆく悶え！
純なる若きたましいの
赤き血をはくが如き覚めゆく悶え！

どうして同情しないでおられよう。肉体に痛みのある病人のためには、病院もあり医者もあり看護婦もある。しかるに、たましいの痛みに苦しむ者のためには、それらにあたる何物もないではないか。目ざめゆくたましいの苦しみ！　これは若きもののいたずらなる悶えとして、むなしき夢とのみ、見すてられねばならないか？

○

あなた方には、こうした悶えがありますまいか？　あなたは、今の境遇に果して感謝し、満足しておられますか？

あなた方のうちには、農業にたずさわっておられる方、看護婦として働いておられる方、店員、工場の従業員と、色々の方がまじっておられましょう。しかし、その仕事が何であっても、それに何ほどの根拠をもち、信念をもち、安心をもっておられますか？

おききなさい！　あれ、あのように、鐘の音が聞えます。

覚めよ！　さめよ！

人生五十年
眠ってくらし
眠ったままに死ぬるのか？
きくまいと、すればするほど鳴りひびく。ボーン……ボーン……ボーン……。
誰が好んで眠るものか。覚めたいのだ。しかし何とも仕方がないではないか。
無情の鐘よ！　ひびくをやめよ！
さらでだに胸はおどる
悶ゆるはわれらの罪か？
悶えねばならぬ世の罪か？
心なき鐘はまたひびく。ボーン……ボーン……ボーン……。

○

覚めたい、さめないではいられない。意義なき現状のくり返しにたいする不満。もっともです。苦しみ悶えるのが当然です。

しかし、覚めるとはどうすることでしょう？　あなた方は、単に農業がいやでなく、田舎をきらうのでなく、妻となり母となるのをいとうわけではないのでした。深い眠りより覚めたい。覚めたまなこで見て、不安のない、信念をもった毎日を、意義のあるように送って行きたいのでした。そうです！　覚めるのがいいのです。覚めねばならないのです。しかし、いかに覚むべきか？　これが最も大きい問題であり、あなた方の生涯を活かしもし、殺しもする分岐点となるのでございます。私どもが心配いたします点は、そこにあります。覚めよという鐘は、あちらの森でも、こちらの峰でも鳴りつづけます。しかし、いかに覚むべきかを、誰が教えてくれますか？

まっすぐに思いつめた理想は、簡単であり明瞭であっても、それを実現する道は、決して、そんなに単純なもの、平坦なものではありません。

のぞみは高くもつべきです。低級なあきらめをしてはなりません。しかし、望みにいたる道程は、きわめて厳粛であります。けっして冗談や慰み半分で達せられるものではありません。

人間が低いあきらめをすれば獣になります。あきらめないところにこそ、向上もあり、努力もあります。悶えなさい！　苦しみなさい！　豚のような眠りをつづけることは堕落です。悶えなさい！　苦しみなさい！

酔っぱらいのような気休めの楽天的生活も、酒のけのある間は、それですみましょう。しかし、ひとたびその酔いのさめたとき、深い恐ろしい寂寞におそわれます。

『運命だから仕方がない。』という言葉を聞きます。仕方がないということはぜったいにありません。何とか道のありそうなもの、人間には人間の真心からの願いが実現さるべき道は、どこかになくてはならぬと考えてみるのです。

そうです。道はあるのです。ただ一人でもたましいの束縛を受けてはおりません。あなた方すべての前に、明るい一本道が、白くかがやいているのです。

どんなに苦しんでもいい、悶えてもいい。しかし、必ず前途に光明のあることを忘れてはなりません。信じて下さい。あなた方の一人残らずが、確信をもって、毎日を貴く送りうる感謝の日がまいります。もしその日がこないならば、あまりにみじめな生涯ではございませんか。講話の進むにしたがって健全なる、覚むべき道が分かります。

私共は、無理解な、時代おくれの人々のように、道理もない圧制をいたしません。旧習に盲従せよとも申しません。しかし、ただ覚めよ、ただ活きよと、無責任な鐘をならしつづけるような、冷酷な叫びをしたくないのでございます。どうぞ次の講話をお待ち下さいませ。（休憩）

一切を活かして

大自然の復活

まっくらい夜、遠い山の峰に帯をはいたような真赤な火が見えた。

『お父様、あれは何でございます?』

『野火だよ。今にあたたかくなったら、あの焼跡からワラビが出るよ。』

私は三十幾年前の昔を思い出します。庭の桜が散りかけたころ、お弁当を用意して、みんなにつれられワラビ狩りに出かけた思い出が、昨日のことのように、あざやかに浮びます。

赤ン坊のコブシのような可愛いワラビが、黒い土から頭を上げている。日あたりのいいところは、芝生の色がうす緑にかわりかけている。ヒバリがあがる。かげろうが流れる。どこからか山桜の花ビラがとんでくる。南の谷の菜の花畑、梨畑、桃畑、それにつづくくぬぎ山、やわらかい新芽がかがやいて見える。

春は一切が生きがえる時でございます。すべてが生きがえるとき、どうして眠っておられましょう、生きないでおられましょう。

いま皆様とともに、一切を活かす生活について考えたいのでございます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com